

地域のごみを地域の財産に

# 河北地区 ごみ減量の取り組み

今年もいよいよ最後の月を迎えました。大掃除をして身も心もスッキリとして新年を迎えるため、各家庭から大量のごみが出される月でもあります。今月号の特集は、ごみの減量に取り組む河北地区をご紹介します。



▲回収した生ごみを河北エコ・ステーションのかくはん機に投入する作業

## 生ごみを再利用

ごみ減量化はここ数十年、常に叫ばれ、そのためのさまざまなアイデアが生まれ実践されてきました。

エコバッグの持ち歩きによるレジ袋の削減、詰め替え用商品の利用による使い捨て容器の削減、資源ごみのリサイクルなど、今では当たり前前意識として浸透してきていますね。

最近では、グローバル企業もプラスチック製ストローを段階的に廃止することを発表し、大きな話題になりました。プラスチックごみによる海洋汚染の問題で、企業が使い捨てのプラスチック使用を廃止する意向を示し始めています。

地球環境を守るため、私たちもより一層ごみの減量に取り組まなくてはなりません。

大口町北部の河北地区では、平成15年から生ごみの減量化を目指した実験的な取り組みがおこなわれています。当時の大口町長 酒井鉄さんの「家庭から出る厨芥類（生ごみ）を、燃やすのではなく堆肥にしたらいい」という声上げで、まずは江南丹羽環境管理組合 環境美化センターを抱え



る河北地区で、モデルケースとしてデモンストレーションがおこなわれたのです。そもそも多量の水分を含む「生ごみ」は、燃やすのに膨大なエネルギーを使い、また燃やすことによる二酸化炭素の排出も無視できません。地球温暖化が叫ばれる昨今、生ごみを少しでも減らすことは経費削減のみならず環境保全にもつながります。堆肥にすることにより、ゴミ減量だけでなく土壌改良につながれば、まさに一石二鳥です。

## 実験に実験を重ね…

当時、岐阜大学生物資源生産学科の教授であった林進さんの監修を受け、ドラム缶を使った手作りの堆肥

化装置を河北グラウンドの現自転車置き場に並べ、デモンストレーションがおこなわれました。発酵の促進と臭気を抑えるため納豆菌を使い、装置内をかくはんする作業を24時間おこないました。生ごみ投入後、2週間ほどででき上がった有機質の堆肥は、月1回資源ごみの回収日に河北学供、仲沖集会場、二ツ屋学共で無料配布されました。

**地域力を結集!**

このデモンストレーションを実施するにあたり、なくてはならなかったのが地域住民の協力です。各家庭で生ごみをしっかり分別して出していただくのはもちろんのこと、収集



▲駐車場に置かれた当時の堆肥化装置



▲堆肥で作った野菜で朝市も開催しました

には地域の老人クラブのグラウンド・ゴルフ会員のみなさんが活躍しました。

まず、早朝に役場職員が河北地区内の13か所に計20個ほどのポリバケツを設置。回収時間に合わせ、老人クラブのみなさんが手分けして軽トラックで回収する作業を週二日。それが2年ほど続きました。

ポリバケツ設置をおこなっていた当時の職員は言います。「最初は早朝からポリバケツを置いて回っていました(その後前夜11時に変更)。不思議と大変だとは思わず、早起きのため飲酒運転とならないように前日は休肝日。その休肝日の習慣が10年以上たった今でも続いて、健康に役立っています(笑)。地域に

ひんぱんに足を運んでいたのが、河北地区のみなさんとは今でも顔見知り。当時付き合いがあった方たちは、今でもいろいろな面で理解者となってくれています。渦中にあつたときは大変でしたが、今思えばおもしろく、楽しい事業でした。この手作り堆肥化装置は、地域のみなさんに徐々に受け入れられ、「自分たちの施設」として大切にされています。ほうきなどの掃除道具を常備すると、住民のみなさんがみずから掃

除を買って出てくれたり、手作りの脱臭装置を取り付けてくれたり。河北地区のごみ分別意識がさらに高くなりました。  
堆肥化装置が行政と住民の交流の橋渡しとなり、また、住民のみなさんの力が結集するきっかけともなっていたようです。この取り組みは平成17年の「資源循環型生産システムシンポジウム」(資源循環型生産システム研究会主催)において、会長賞を受賞。「大口町生ごみ堆肥化プロ

**可燃ごみの減量**



リフューズ (REFUSE)・リデュース (REDUCE)・リユース (REUSE)・リサイクル (RECYCLE) の4つの単語の頭文字「R」をとった「4R」はごみを減らして、環境にやさしい社会をつくるキーワードです。



▲河北エコ・ステーション

「シエクト」として表彰されました。また、住民レベルの活動団体も誕生しました。焼却ごみ減量促進活動により環境保全意識を高めることを目標に掲げた「河北エコ・リサイクルの会」。生ごみの堆肥化に協力し、でき上がった堆肥を積極的に土壌改良に利用しました。

「環境美化センターを抱える河北区の住民として、被害者意識だけではなく、ごみを出している当人であるという加害者意識を持つことが大切。そのため、自分たちでできるだけの協力はするという姿勢を持たねば」と元代表。

## 河北エコ・ステーション

このデモンストレーション施設は、その後、江南丹羽環境管理組合環境美化センター敷地内の「河北エコ・ステーション」に移し、大型の堆肥化装置が3台、粉碎装置が1台設置され、現在も河北地区の生ごみを堆肥化するためフル稼働しています。

ステーションでは、コミュニティ・ワークセンターから派遣されたスタッフが業務にあたっています。回収スタッフ、現場スタッフ、バケツの洗浄スタッフに分かれ、週2回の午前中に体力のある大変な作業をしておられます。今年で4年目という秋田丘也さん(70)は、「大変な作業



▲生ごみ回収されたポリバケツ

だが、ゴミ減量化に役立つやりがいのある仕事。誰かがやらなくてはという気持ちでやっています。元気なうちは、頑張ります！」と、笑顔で話してくれました。



▲できあがった堆肥

## 取材にて

さわやかな秋晴れの朝、黄金色に輝く稲が実る田園風景の真ん中に建つ、河北エコ・ステーションで取材させていただきました。

堆肥化装置1号、2号、3号と名付けられた1m四方ほどの機械が鈍い音をたてて稼働していました。河北エコ・ステーションの三角屋根の下からは、各装置につながった煙突が突き出し、排気をしていました。建物に入ると、味噌の臭いに似た発酵の臭い。夏は高温になるため、作業員の方は服や顔に臭いがしみつき、落とすのが大変なのだそう。それでも、笑顔で働

いておられる姿に接して、環境保全に貢献する、時代の先をゆく取り組みに関わっているという誇りが達成感を生んでいるように感じられました。

河北エコ・ステーションの壁には絵が飾られています。青空を背景に電線に並んだすずめたちが、電線に引っかかった釣り糸を引っ張り、同じく引っかかったゴミ袋を眺めている絵。生ごみ堆肥化のデモンストレーションのときに積極的に協力をされた住民の伊藤光子さんの作品です。のどかで平和な風景とは対照的な釣り糸やゴミ袋。ほんのささいなゴミ一つが、自然にとっては破壊の第一歩であり、積もり積もれば取り返しのつかないことになるという警告です。私たち一人ひとりができることはわずかもかもしれませんが、まずはルールを守るなど、身近なことができることから始め意識を高めていくことが大切であると改めて肝に銘じました。

